

冬と農夫

宿沢献字

ふと紙面から顔を上げれば

気層の獣の咆哮に

庭のかきねはしもにおおわれ

白銅色の水面には

ざらめの粒が降り積もる

(暮六つにして宵の口)

小さな吊り下げ灯の下

小さな円座に腰落とし

MISTEL 月白の景色をながめ

このわたし何をみているか

(硝子のつぶのまいちる中に)

かきねのしもをのりこえし花

MISTEL 極寒のそらでかがやく翡翠

無彩色の内に有彩色を

侘しさの中に幸せをみつけ

それを噛みしめまた過ごす

(ことばにかわらぬその風景の

側面のすがたうっしだし)

まだ明星の輝く未明

(みなもの反射と天の藍)

おのれを包みしあたたかさの中

また一日を進みゆく